

昭和も遠くなりになり！

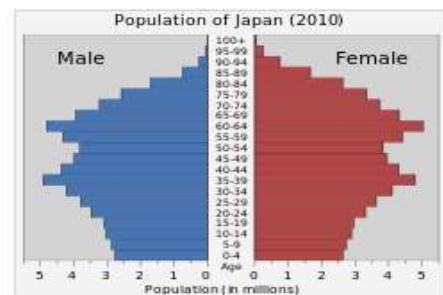
改元5か月——新和暦に入っているいろんなことが変わりつつあり、オリンピック・パラリンピックを機に東京の街も大きく変貌しようとしています。自分が生まれ育った「昭和」は「平成」を挟んでぐっと遠くに行ってしまいました。以下は私の目に映った変化です。あくまでも個人的な印象ですが・・・。

人口と家族構成

私が生まれた1941年（昭和16年）、日本の人口は7,300万人でした。18歳で長野県から東京に出てきた1959年（昭和34年）には9,000万人を超え、2010年（平成22年）には1億2,800万に達しました。そこから人口減少への下り坂は止めようもなく「少子高齢化社会」へ急行しているように思えます。

昭和時代の戦前、戦中、そして戦後まもなくは「産めよ、増やせよ」といった時代で、私の兄弟は5人、父親の兄弟は7人でした。地方ではそのくらい普通だったのです。現在のよう少子化時代などは想像さえできなかった。

ある意味で「人口は国力」です。3年前に訪れたインドの活気を思い出します。現在、人口は13億でもなく中国を追い抜き世界一になると言われています。国民の半分以上が30歳以下で、IT産業の伸展ぶりから50年、100年後にインドは世界で経済的、政治的にもトップになると分析する専門家もいます。



なぜ今、日本で子どもが少なくなっているのでしょうか。単純に言えば若い女性が結婚（出産）しないから。なぜ女性は結婚しないのか。さまざまに分析されていますが、一つは大学への進学率も男性と同じようになり働く場も女性に開かれてきたこと。そこから結婚しなくても女性が一人で生きていける社会になってきたことでしょう。それに子どもができれば多額の養育費がかかる。つまらない男性と一緒にあってその面倒を見ていくより一人でいた方がずっと自由で楽しんでいける・・・といった女性側の思いもあるようです。

これ以上の推測は慎みたいと思いますが、太古から動物の雄と雌が求め合う、人間の男と女が結びつくという自然の摂理が、文明の進歩によって歪められていってしまうのでしょうか。何か気になってくるところです。

10歳以上も寿命は伸びたが・・・

34歳でパナマ特派員として長期派遣の話が出た1976年（昭和51年）の男性の平均寿命は71歳くらいでした。亜熱帯の熱暑の気候。文化もあまり無く厳しい生活が予想されましたが、そのとき心に決したものでした。「もう人生の半分は生きてきた。だから、どんな厳しい環境下でも、残りの人生は無いと思ったら何でもできる」と。



その後、諸状況が変わり10年間の駐在で帰国しましたが、今、男性の平均寿命は81歳。10歳も寿命が伸びているのです。そして突入した「少子高齢化社会」。人生100年と言われる時代に最後の20～30年をどう生きていくかは大きな問題になっています。超高齢社会といっ

でも、多くの長寿者がベッドに寝たきりで介護されている姿が増えつつある。年金を受け取り、高度な医療を受け、重度の介護を必要とする人たちがこれから更に増大していくことでしょう。財政負担の増大も論じられています。

ある専門家は「長寿、長命が世間から祝福された時代は過ぎた。老人というのは、露骨な言い方をすれば、今は社会のお荷物となっている」と発言しています。「ボケる」という表現が「認知能力の衰え」と言い換えられるようになって、現実は変わらないのです。

2年前に105歳で亡くなりシニアの指標でもあった医師・日野原重明さんは、心理学者・多湖輝さんとの対談「長いきすりゃいいってもんじゃない」の著書で述べています。「どれだけ長く生きるかということではなく、どれだけ深く生きるかが大切です」また「自分のためにも、世のため人のためにもなる『生き方』を工夫していきたい」と。生きる姿勢が大事だとの発言に同感です。

「昭和」の時代には、長寿者には自治体から“お祝い金”が届いていたものですが、「令和」に入ってそんな施策が続いていくかどうか気になるところです。昭和から令和へ、高齢者への見方も大きく変化しているようです。

障害者への認識が変わった

こうしたなか嬉しい流れも見られます。先の参議院選挙で2人の障害者が当選しました。参議院としても初めてのケースだったので、障害者向けに建物内と議場が改築され、介護者が付き添い議員の発言を補助していた場面が何回もテレビに流れました。来年のパラリンピックには多額な予算と力が投入されているように、国が社会が障害者を社会の一員として対等に遇していこうという時代の大きな変化を感じるのです。



子どものころ、私が育った田舎では障害者が道路を通行していると周囲は奇異な目でジロジロと見ていたものでした。

障害者を持つ家族も後ろめたく、当人をできるだけ外に出さないように隠していた。いわゆる「座敷牢」と言われる言葉まであったのです。

ここで障害者自身と周囲の意識の改革に半世紀以上取り組んできた、私が誇りとする身障者の友人の生きざまを紹介します。

伊東弘泰さん。1966年（昭和41年）、大学を卒業すると同時に「保障よりも（働く）チャンス！」をモットーに「日本アビリティーズ協会」を結成し、その実証体としての会社を5人の身障者仲間と立ち上げ奮闘してきました。数々の苦難と変遷を経て今、会社は1000人近い従業員（3割以上が障害者）を擁する企業に成長し、会社は法人税を、障害を持つ従業員も所得税を納さめ、会社は株主にも配当をしています。

伊東さんは訴えています。「——身障者は弱いものだから保障されなければやっていけないという。たしかに庇護されなければ生きていけない重度の人たちも多い。その人たちには当然、十分な保障が必要である。しかし、やればできるのに、やろうとしない身障者、機会を与えればすばらしい力を発揮する可能性を持っているのに、機会を与えられない人が、非常に多いのである。我々は、このような人に呼びかけ、一度や二度の失敗でおびえるのではなく、共に力を合わせて挑戦することを試みたいのである——」

こんな理念が生かされていく障害者政策を期待する次第です。

世界もこんなにも変化してきた

大学を卒業したばかりに購読した「世界文化シリーズ」(昭和 41=1966 年発刊)からの抜粋です。



- ◇ 東京—シアトル アンカレッジ経由で 18 時間 片道 1 等 453,600 円、エコノミー281,880 円 (1 ドル=360 円)
- ◇ 東京—パリ 北極回り 19 時間。1 等片道 405,250 円、エコノミー片道 243,950 円 (1 ドル=4.94 フラン)
- ◇ 50 年前の北朝鮮についての記事：(映画監督の言葉)・・・整然とした広い街並み、いたるところにある遊歩道や公園、そして解放前は貧民の巣窟であったと言われた場所が美しい公園に代わり、劇場や体育場等に変わっている・・・北朝鮮は日増しに豊かになりつつあるように思われた。老人と子供は大切にされている。まだ貴重品である毛のオーバーも子供たちには真っ先に支給された。・・・平壤に限らず、どこに行っても街も公園もきれいなのに驚く。
- ◇ <写真キャプション>人民と歩む金日成首相。抗日人民革命軍を率いて日本の 36 年にわたる朝鮮支配を終結させた金日成は、朝鮮戦争後、灰じんと化した北朝鮮にあつて、次々と経済計画を打ち出し、素晴らしい指導力を発揮し、現在の人民共和国を築いた民族的英雄といえよう。

「エッ」と思うような記述ですが、半世紀前の本ではこのように書かれているのです。

「昭和」「平成」「令和」の時代の推移の中で、私の場合、なぜか平成より昭和の時代の記憶の方がはるかに鮮明のような気がします。その「昭和」が今、遠く、遠くなりつつあるのです。この稿をお読みいただいた皆さまはいかがでしょう？

読売新聞 8 月の「川柳」欄からです。

戦争を知らぬ祖父母がいる平和
壊れたらたたいて直したあの時代
充電が切れて昭和の待ち合わせ
ボクだけか阪神柏戸ゆで卵



終戦直後のラジオと同じ型